

支障の無き限り大抵纏まるもので、之は責任とか信用とかいふもの、關係からである。彼等は斯ふ知つてゐて其同類を親戚に仕立て、申込むなどがあるので、調査もせずに輕々しく信用すると往々不幸を招く。

或る旅館の女中を附近名勝案内依頼の名儀にて連出し旗亭に泊りて姦し、其後男は此女から金を貰つてゐたといふ例がある。

Aと仲よしのKがある夜私に「此次の休日に淺草へ連れて行つてくれない？」ときいた「ウム行つてもいい」さう、ではきつとよAさんと三人でね」とKは傍人へ聞えぬやうに小聲で云つた。そして約束の日に待合はする場所の打合せもした。其日彼等は自動車を雇つて雷門まで行つた。かく女の同伴者があることに安心して外出を肯ずることもあるが、此場合彼は途中で同伴者を別離すべく、普通に五圓か十圓を掴ませ、他へ赴ひかせて畏に墜す。

誘き出し

最初に會ふたときの、第一印象が好感を興へると萬事都合よく運ぶ。第一印象がよくとも其後に此好感を破壊する場合は生ずることもあるが、初め不快人たる感じを興へた者漸次に好感へ導くは手緩らいと知れる彼は、初めは友人連れなどにて陽氣にやり、己が好む給仕を磨きて特に祝儀を興へ且つ嘖めて、必らず毎つも其給仕たるべきを申渡しさて當番の給仕には、彼は早くもチップを包みて渡しそして靜かに「濟まぬけれどあの女給仕を呼んでくれ」と頼んだりする。或は當番の交替其他の游泳すべき店風などを訊き又は彼女の内外の色々を訊ね聴くのが毎であつた。態度は犯し難くして面語の場合には親切に、馴致するためと試験のため輕微なる刺戟をも興へて、さて支拂の時分になつて五圓紙幣を出し、勘定が二圓に過ぎぬからと女が剩錢を返さうとすると拒みつゝ、「さうか、ではそれは次回の勘定へ差向くるために預つておいて貰

はう」憚うよく云つた。祝儀は祝儀として別に渡し、釣銭は完全に受取る捌け方もある。金費ひの荒いのを好まず只金の切れのよいのを好み、馬鹿騒ぎに金を湯水の如く使ふ人より、金を上手に行き渡らして遣ふ者を好むのは誰しも同じである。

二回目には必らず一人にて出掛ける、此時には此所の他の女給に親しく語りて、目的の女にはあまり語らずに秋風立ち初めたるやと疑はしめ、羨やましがらせ嫉妬の燃え競走心の起るを利用し（凡て利用は賢い方法であるが悪用されることあるを警戒せねばならぬ）其虚に乗じて誘出する術策が用ひられる。すなはち一旦は惚れたと見せてさて機會を見て、今度は他へ惚れたやうな言語應待を彼女に見せつける方法である。「藝妓を呼ばうか？ 併し其れだけの費用を君に呈げるから、藝妓の代りに傍に居て貰つた方が好い」なども云つた。

それは彼女に與へたのかたゞしは預つたのか疑はしい態度と口調で、或は飲食前に廿圓紙幣を女中へ預けて、今日は此額の半分を使ふ心算だがと、残額は與ふるものか否か不明にしておく、斯くて其金で彼女がつひ安心と信用——それは最後の場面に於て甚だしき抗拒を受けぬやうにする準備のために——をすれば、其好みに従て、遊山又は觀劇の誘ひを諾するであらうし、遊びに来る誘ひにも従ふであらうと看られてゐる。

旗亭の女等の誘出には恁んな方法が行はれる。それは誘出を要するものと計劃されたととき、會ふことの二度目、多くも三度目頃に行はれる。入湯の序や髮結の折の有るは勿論、親戚とか田舎の親元へとか、用事と云ひても外 出の時間は隨時にあるに、暇なしと云つて躊躇するは遁辭と同様なりと責めらる。「出られるかどうか何故解からぬといふの、帳場で許さないかも知れぬと云ふの？」言質を捕るべく斯ふきかれて、「然う」とても返事をする大變である。それらの店の多くは夜間は忙がしいが、日中から夕景頃迄は割方閑散時であるから、女は此間に大低外出を許されるので、男は早速帳場へ交渉して、許されたから濟まぬが是非今日、何處々々へ同行してくれと、

同行せざる可からざる破目にされる。明日の同行をも肯かなかつたり違約を憚らぬ者は愈々縁がないとされるのである。障害ありとて誘出に應せねば、其理由が小なれば小なる程、相互間の溝渠は深いものと思つて間違はないと止めを刺される。

遊山や買物に伴はれた歸るさには、豫て好都合と見定められたる小料理屋などへ、遂に強制的に實行の機會を作られる。或者は途中詐りて病を装ひ宿屋へ連れ込んだ。一方は責任觀念によりて、男が急に病だといふを見捨て去る譯にもならず、與へられたものに對する謝禮的な考からも強き反抗を爲し得なく、連れ込まれて遂に意に従はせられた。それらの實行は朝飯前の仕事と容易に考へられてゐる。

先づ之は手付けた、といつて五圓紙幣を渡す「其代り僕の命令に従ふんだよ」と云つた。氣取られぬやうに機を見て貞操觀を説いた。戀愛、肉慾、結婚の獨立説などを主張した。あはよくば強刺戟をも與へられ、此處に彼女は物慾を挑發され教唆され利用されることとなる。萬一の場合の救助を約されて迂か手段を容るすと、冷酷鬼の

如き彼の目的をして達成させることになるのである。

無理由で「反物を買つてやらう」といふことは、不安の疑を懷かれて不利であるとして、新聞紙包の外から品名の判かり易いものを「此中に箱が入つてゐる？」當てたら反物を買つてやらう」こんな風にいつて言ひ當てさせる。かうして買つて呉れるがために誰しも不安を懷き得ないのである。何にまれ與へらるゝは承諾の媒介となるが或る男二圓許りの支拂に十圓紙幣を出して、釣錢を女に與へたので女は一寸魅された。若し工合が悪るければ、友達をも一緒に連れて行かうとて、女と某友と三人連れにて散歩した。斯ふして安心させ、次の夜に女は連れ出されて思ふ壺に誘はれた。

若し彼女が要求を拒ける場合には何時でも、預けたるの理由を以て金品の返還を請求し、場合によりては横領の刑事問題といふを提げ之を利器とし、其權利を主張し返濟を求め得やうといふのである。三度目で目鼻が付かなかつたら借倒した」とよく彼が云つてゐた。

着物の色目柄行などの事から語り出して、漸やく其慾望を挑發せしめ、三越呉服店それは彼女等が感溺してゐる虚榮の心を満足さすべく美しく商品——着物や指輪や——を陳列販賣してゐる『其所へ同伴して行つて好きな物を買つて與らうから』と云つて誘はれたとき、彼女等は萬障を差繰つても行くべき日時を約束する。愛する否とに係はらず必らず彼女は連れ出される。

時期として彼女等の準備欲望の大なる正月前、衣更の前、それから金銭収入が少ないか支出が多いかして金銭價値の多い頃を撰ばれる。指輪は當座の縁つなぎといふが、其贈物の恩惠的行爲が惹き起す對手方の謝恩的服従心と、當時の記憶を惹起することによつて、益々縁を深からしむることをいふのである。

攻道具

上 述べたものよりもつと氣永な例がある。遠ざかれば疎んせられ離るゝこと長け

れば愈々忘れられると同様に、毎日の食事を採りに行けば自然親しみが出来る。そのうちに性格を語り境遇を告げ、獨身なりとして安心せしむるうちに情が生じ、様子が解かり信用も出来る。『おれはチップ無しだ、何處へ行つても出さぬことにしてゐる代りに、蓄めておいて一緒に、欲しいものを買つてやるのだ、それで宜ければ給仕し、氣に入らねば給仕せぬがよろしい』 彼は斯う初めから淡泊りと云つてチップの負担を免かれ、誘出の伏線を張つた。斯ふしておいて聽て買物のために容易に誘出しようとするのである。

またかうされることもある。初め彼女の被服の柄を誹る。誹つておいて「半襟位なら買つてやらう」といふ。彼は厭味のないやうに紙幣の數枚を見せびらかし「不要な金が五六十圓あるのだがさて消費ひ所がなくて困つてゐる。如何だえ何處かへ一緒に遊びに行かうか？」などいふ。彼女は得んがための職業婦人であるから、特別事情なき限り、與へらるゝを嬉こぶ。簡単な食後、支拂を済まし、約を履行すべく伴出さ

れて半襟を買ひ與へられる。次回にはもつと好い品を買ひ與ふ可きを約される。慥んな誘出を二三回續けたら、彼の信用は絶大なものになつて了ふ。尤も斯様にするには其店の主人へ歡を通じおき、諒解を得るが最も容易と觀られてゐる。女給の中には相當に要求もし出捐又は出資をさせて、頃合になつてから、彼の出段をこえて却つて外出同伴の約を拒けたり行手を晦ますのがある。之に對しては豫め此事なかるべき言質を求め、或は購賣のための誘出後に出資するのだと云つてゐる。客と女給の虚實懸引魂膽は中々に目覺ましいものである。

「將を得んと欲せば先づ馬を射よ」で従者から主人を取込みて種々に利益あらしめ、雇女を取込むには、其主人や友人から要領よく取り入る。「何とかなら其朋輩に好くせよ」といふのがある。で先づ彼女の母の歡心を得、さうして美しく其娘を得やうとした者がある。初めは手土産などから万事如才なく振舞つたので、計略は數回ならずして易々と成功し、彼女の母が彼を信ずることは、恰かも己が子の如うになつてきた。

……そして其母の許を得て娘を伴れ出した。或者が女の母へ毎月金子を仕送りして女を手に入れた例もある。

斯様であるから誘出のため祝儀と稱して五圓位を帳場へ置くことは、彼女等の外出料一回三圓宛をとるレストーランのある事から考へても相像し得る主人は女給への情として許可をする、まして多くの主人は、雇女の貞操など塵芥と同一視する利己主義者なのであるから、彼女等が客に伴出されることを歡んでゐる。

女給を周旋（或場合には他より引抜きて其處へ住替へさせる）することは、其處に恩義を生じ、主人も女給も普通客以上の取扱をするから、何かと彼の都合に好く運ばれ勝ちになる。

次回には近所の呉服屋で衣類か傘か帯か欲しいものを買つてやらう、と意向を求め序に自分の衣類をもひふのだから柄を見たてゝ呉れと誘ふ。現金の場合と異ふから躊躇なく希望の旨を申出るので連れ出されることになる。さて氣に入つた柄もないから

どうせ買ふなら、小呉服店よりは一層大呉服店へ行つてと伴はれる。斯うした言葉は野心あつてのこと、想はれぬから、安心して應ずる譯である。

『晝飯を驕らう』と云つて連出されることもある。遊廊へ見物にとて車に乗せて誘ふもあつた。『俺れの（初めから馴々しい言葉を使つて）寫真機であの景色を背景にして寫したいから……後姿だけでもよろし、お禮は望みの品を買與ふべければ』といふもある。斯ふして彼は對手を誘き出したものだ。

『明日は午後三時に三越へ連れて行つて反物を購つてやらう』『どうぞ』『何時頃にか確つかり定めやう』『私出られるかどうか解かりません』といふ。前には同行し得る如く、希望と承諾とを云ひながら後には、同行し得るや否や不明だといふ。『得んとすれば先づ與へよ』であるからと活動寫真を觀に行かうと云つて、彼女の意を得るために五圓位を預けて約束をしたり、連出す目的で先に反物を買ひ與へたに係はらず、違約して出て來なかつたり、其場で逃げられたりすると丸損で手數がかかるからと先に與

へず出行してから後に與へるか又は一旦與へかけて、活動と買物とに使はふぢやないかと約束して見せて容易に與へず、そして此處迄おいで式に引ずつて行き與ふる時をどたん場の、急所々々に於てする。即ち難關と見てとつたときチラ／＼見せては引き愈々の場合で遂に與へては又先へ引かれる。

責任を負ふことは自由を制限される意味で嫌がるものだから、反對給付をして誘出しやうとする。『何某所へ行つてくれるならば贈與しやう』といふやうな、責任負担を先にし給付條件を後にせず、『贈與するから何處へ行つてくれと給付條件を先に與へて責任を負担せしむる願望體的に言はるゝので、容易に承諾してしまふ。併し對手に責任負担を言はず即ち給付——贈與——のみのために誘出されるときには、こんな條件や承諾云々の猶豫さをも無く、そして後に回避し得ぬ状態に作爲して、事實に義務を負はせられるのである。

買ひ與へられた衣裳を着て同行するを條件とされたとき、反物を買ふてやるのだから

ら裏地位はと、彼女が負担させられる而して衣裳は出来上つたが條件が履行されぬ場合には、贈與は取消され損害賠償の難題が持掛けられる。此の請求に應ずるのは損ばかり、矢張り舊約束履行の己むを得ざる事にはならうけれど、こゝまで頑張つた者には抗拒の準備も出来て行くから、こんなのに係り合つて居るのは不得策であるとして、男の方で逃げてゆく。

親切氣に身元をたづねて

某小料理店へ年頃三十六七、薩摩上布に緞の羽織をひつかけた一人の男が上つた。折から番にあたつて席へ待したのは、二十歳の□□といふ女であつた。□□を相手に飲んだかの男は、さも親切氣に女の身元などを尋ねた。女は一度夫を持つたが餘りの放蕩に愛想をつかし、今はこの附近の二階の一室を借り受けて此家へ手傳に來てゐるのだと語つた。男はその日は何氣なしに慰めながら、幾何かの祝儀を取らして立歸

つた。その後男は足繁く此家へ通つて來た。そして其の都度□□に酌をさせ快く酔ふて歸るを常としてゐた。

或夜の事□□と差向ひで飲んでゐた彼の男は、酔ふにつれて懷中より一葉の名刺を出し「自分は斯ういふものだが、一人なら俺の世話になる氣はないか」と言葉巧みに言ひ寄つた。□□はこの社會にゐる女としては珍らしいほど温和な女であつた。そして今一人身の心寂しき折柄とて脆くも男の術中に陥つてその意に従つた。男は我事成れりと心秘かに喜び、尙ほも□□の借間の疊を取替へるとか衣服を買ふてやるとか、盛んに甘い言葉を以て己が手中のものとして了つた。

□□は男の親切を心から感謝した。そして飽くまでも男に頼らうとした。或日男は此家へ來て、充分酒食した末生憎持合せがないから一時立替へておくやう□□に命じた。□□は持合せが無かつたが、大切な男の事とて多くもあらぬ衣類を取出しそれを擔保としてその場を取り繕ふた。その後約束の日になるも可愛い男の姿は見えず、

そのうち此家の主人からは厳しく請求され、朋輩からは冷笑され、終には借間の主人からまで、男を當ての不義理の借財の督促を受ける始末に、哀れや衣類を預けたまゝ、着のみ着の儘で家出するやうな悲境に陥つた。

●●●●●● 或日東仲町の周旋屋の暖簾を潜つて主人に、妾の周旋を依頼した者があつた。折しも其場に居合せた一人の粹な美人があつた。その名を△△△子と云ひ芳紀正に十九、昨年迄新橋で左棲を取つたものだが、青山邊に住む某工學士に落籍されて樂しき家庭の人となつたも束の間、家庭の不和より破鏡の嘆を見、一時廣小路の或るバーの女給となつたが、思はしい収入もない處から、再び左棲を取る氣になつて此家を訪れたのであつた。

怪しの男は此美人に目をつけ、主人を小蔭へ呼んで世話を頼んだので、主人の斡旋によつて兎も角も世話を受けることとなり、幾許かの周旋料と女に手附を渡して其夜

は、仲見世裏の寶來屋旅館へ二人は泊つた。二日の後男は△△子の假宿先なる東仲町の藤元を尋ねた。そして相携へてその夜も寶來屋へ泊つた。この夜△△子は約束の金を請求した。男は生憎持合せ無き故、十日後には手に入るべき手形ありとて、安心さするため百八十五圓の約束手形を預け、當日引換へに來ることを誓つて別かれた。

△△子は手形を手にするに其に安心したものか、此事を家の主人に話して只管當日を待つて居た。處が期日の前の夜、男は△△子に「お前が持つてゐても俺れの印形がなければ金は受取れぬから明後日受取つて來て金は渡す」と言葉巧みに欺き、手形を捲き上げたまゝ終に姿を見せなかつた。

これより先、男には既に増す花が出來て居たので、それは時折△△子の家へ出合つた花川戸町一番地〇〇子で、彼は早くも彼女の寓居を聞き、同家へ押掛けて例の甘言で説いてみた。〇子は△△子の友達とて容易に彼の意に従はなかつたが、其夜酒に酔ふて再び同家を訪れ、終に無残にも手籠め同様に情を通じた。そして△△子と別か

れたから妾になれと言寄つた。弱きものよ汝の名は女なり』哀れ彼女も遂に色魔の藥籠中の者となり終つた。斯くて彼女の歡心を買ふべく、△△子を詐つて取上げた以前の手形を渡して彼女の操を弄んでゐた。

そして○子に渡した手形も矢張り△△子同様の手で、期日の前夜終に捲上げて終つた。斯くの如くして、憎むべき色魔は一錢の金をも費さずに妾といふ名義の下に、婦女の節操を弄んだのである。その手段の陋劣なる、其行爲の惡辣なる、吾人は一日たりとも斯かる悖德漢の社會に於ける存在を呪ふものである。

浮雲ないかけ橋

洋食店の娘かね子は、A客から反物を貰らひ帯を購つてもらつたので、彼が誘ふまゝに義理から従はねばならなかつた。ある日の朝、二人は約束の場所で落合つた。そして國技館の展覽會へ見物に行つた。そのうちに女は今日は母と約束があるので、午

後一時までに淺草の仁王門で落合ふことになつてゐるから行かねばならぬと云ひ出した、ではと急ぎ見物もそこへ仁王門へ同行した。Aは母に會つては拙づいので、遠く後ろから従つたが、それらしい者も居なかつた。折柄驟雨が降り出したので、二人は暫らく觀音堂に避けた。彼女は頻りに母を氣遣つた。そして小降りになつた頃、男を其處に待たしておいて母を探しに出たものだ。小半時、彼女は母を尋ね當てなかつたと云つて戻つてきた。それから二人は活動館へ入つたが、女はそこはかとして今度は、母は必つと富士館を觀て居やうから尋ねに行くと云ひ出した。男も氣嫌をとらねばならぬので大概厭やになつた上に、それでは僕は如何しやう？』斯ふいつた言葉など女の耳にも入らぬ體なので、今は其自由にまかせて、別かれて居残りはしたが、落付いて觀ても居られぬので此處を出た。いら々々した孤獨の氣分で歸途に着かうとする、彼女が母と妹らしいのを連れて、公園劇場の看板繪を眺めてゐるのを見た。或男Aは斯ふ話したAが氣弱の方であつたから之だけで済んだのだが、若し強かつた

なら、斯様に永い時間、此多くの機會で彼女は所謂隙だらけなので、若し母を棄てさせられ他所へ連行を強ひられたとき、多分彼女に逃道は無く、已に國技館を出る頃には、自動車で適當な場所へ運び込まれたであらう。

御意のまゝ

遁れ難い攻道具で攻められた、女給の惱みをさき子は左のやうに語つた。

私の店へ、毎晩のやうにゐらつしやる年配の旦那がありました。何んでも會計とかを勤めておいでなさるさうで、お身なりは大島ゾツキ、お年よりは若づくりで、左の薬指に眩ゆい程大きなダイヤの指輪をはめてゐらつしやるのが眼につきました。

私の事を『お嬢々々』とおつしやつてね、それは優しく最負にして下さいました。三日に一度はきつと何か買つて来て下さるといふ具合に、此ルビーの指輪も此

の蘆手の金具の帶止も、銀の白紛容器もその他いろいろの頂戴物をしたのです。

親切な方もあるものだ、私は大變有難く思つて大事に御接待申上げてゐたのです。何でも一月餘り経つた頃から御家庭のお話を承るやうになりましたが、それに依ると旦那様の奥様は昨年お亡くなりなされてまことにお家が淋しい。それで毎晩賑やかなところで御飯をお上りにお出なさるとのことでした。そして私の年や、両親の有無、女給としての収入から、將來の希望などをお尋ねになり、私が働らいて田舎に居る母親を養つてゐることを、お話したところが、大變に感心なされた様子でした。どうも俺はお前を他人のやうに思はれぬ。殊に遠い東京に出稼ぎして母を養ふと云ふ孝心を聞いては、一層可愛くなつてきた。金には不自由しないが、身寄りに薄い俺には、大變お前が頼母しく思へてならぬ。出来るだけの世話をしてやるから、遠慮なく相談するがよい』と、泌々云つて下さる御親切に私も心から嬉しく感じました。

或る晩のこと、常になく一杯機嫌で店へお出でになり、いつものやうに御酒を召上りながら紙入れの中から新らしい郵便貯金帳を出して「これはお前のために拵へたものだ、毎月此の通りに俺が貯金してやる」と仰有つてお渡しになりましたので、見るとその日五十圓おかけになつたのでした。私は眞個に有難くつて幾度もお禮を申し上げました。

四方山の話をしてゐるうち旦那はだん／＼と酔がまわつて「今夜は俺を送つて来い」と仰有るので恰度時間になつて、私も宿へ歸るのでからお言葉に従ふことになつたのです。何しろ零時後の往來、それも十月の中旬といふ裕には薄寒い夜道を京橋から日本橋までお供するので、私は電車でお送りして電車のあるうちに下谷の宿へ歸りたいと思つて、尾張町の停留場で立ち止りますと旦那様は「お嬢、電車は廢さう、酔つた顔を夜風に吹かせお前と話しながらぶら／＼歩いて行きたい」と仰有るので、「だけれど私の歸る電車がなくなりますから………」と

申上げると「なアニ、宅から先は自動車と云ふものがあるよ、さう／＼自動車と云へば、お嬢、これから自動車に乗つて静かな夜道を飛ばさうぢやないか」と被仰るのです。無論これは御酒の上の御酔興ですから「詰らないからお廢しなさいまし」とお止めすると「いや面白いぞ、どうせ二人共待つ人がない同士、ま、俺の言ふことを聞いてつき合つてくれ」と言つて居らつしやる折恰度通りかゝつた空車のタクシーをお呼止めになつたのです。私は乗らうか乗るまいか、いやこんな夜深更當てもなく自動車を乗り廻すなんて、そんな氣狂じみたおつき合は出來ない、と思つたのですが、平常恩義のある旦那のお言葉に背くのも濟まないやうな氣がするし、殊に酔つぱらつた勢ひでかうした無駄をなさるのを、放つて置いておいとまするのも不人情のやうだし、どうしたものかと考へる餘地も與へず「さあ、早く々々」と手を掴へて引つぱり上げられたので、ツイ分別もなく乗かつて仕舞つたんです。それから旦那が運轉手に何か私話くと、運轉手は頷づいてスタートを切り、方向

は日本橋でなくて、南へ南へと疾驅しましたけれども、静かな夜道を自動車で乗り廻さうと云ふのがお望みなんですからと、私は別にこれを怪しみませんでした。三十分あまり飛んだ自動車がビタリと止つて、運転手がドアを開いて挨拶した時に私は「はてな？」と妙な感じがしました。旦那は何気なく「お嬢、こゝは俺の知つてゐる家だ、茶を一杯よばれて行くから、さあお降り」と仰有るのですがどうも私には合點がゆきません、その家の入口を凝つとすかしてみると、御待合と書かれてあつたのでさてはと喫驚いたしました。

妖 鬼

「おとなしく慎ましやかに動作すること」之はバーなど、酔ひどれの亂暴客が多い中で、女給の注意を傾けさせる一手段とされる。……おとなしい優さしい好い方、斯ふ思はせやうといふのである。

修一は先づ女給の玉江に立替へられた金を返すべく、あの珈琲店へ来た、之が縁で彼は殆んど毎日のやうに珈琲店へ夕飯を食べに来る。玉江とはだんく親しくなつて互に打溶けた心で語り合つた。今日も夕方珈琲店に行つた修一に誘はれて、玉江は二三時間の閑をもらつて一緒に靖國神社の境内を散歩してゐる。「僕は只一人の妹とも別かれて了つて全くの一人法師だから……どうか兄妹になつて下さい、何んでも及ぶだけの事をしますから、失敬ながらお金などの入用なときには屹度都合します」こんな巧みな言辭で、一度は芝居見物、好いた品をも買ひ與へ、斯ふして玉江の安心させられたのが抜かりで、遂に或家に連れ込まれ蹂躪された。

六韜三略の摘抉

或る不良青年が持つてゐた女給に對する心得といふ表がある。要點のみを表解したものであるが、之によるとさうした女の誘ひかゝられ易い、弱點を自覺することが出

來、依て一般弱者の修養の参考となし得るから左に掲げてみやう。

彼女に對	態度	第一回	客となりて受持番の女が目的の者であつた時
		第二回	同上が他の女のとき
		第三回	同上
		同上	同上
括淡にして邪氣なしと信用せしむるを第一と心懸くべし。	或は小羊の如かるべし。	金使ひ方は應揚なれ。	女の好む食物を採り與へて
真面目なれ			同
兄妹の如く馴れ親しむべし			要を得しならば簡単に引上
目的の女に見ゆるやういちや付くべし			女に好むものを馳走しやる

其他	祝儀金	可能性皆無にあらざる場合の	一圓	場所によりて額に差あれど	可能性の度を測るため女の口裏を引きて獨身者か否かを探るべし	談話の機を多からしむ
			二圓	同上	可能性ある場合には女の趣味嗜好等より行樂又買物の事を談じ同伴を仄めかす	
			十圓	同上	平日が不都合ならば公休日終日に非らざれば夕刻迄の外遊同行の約日取。待合せ場所等	ぐる用意あるべし
			五十錢餘	同上	目的の女に關する事を訊ねべし、而して嫉妬心を起さして目的者の家庭關係事情等をさくべし	

速成	見込によりては代金支拂と共に二十圓位を差出して贈與し又は預けおく	主人及コックに款を通ず		
<p>場面の變化や好状態に轉換することの儘かさになかつたなら、此の儘何時迄居ても同じことであると觀察して、見切りを付け引上げるのが肝腎で、も少し居れば好状態になるだらうと」漫然たる誤つた觀察の「も少しも少時」に引釣られて無駄な費をするのは愚な事である。</p>				

與太樓主人の「女給を手に入れる虎の巻」といふのが、「實業之世界」昭和三年二月號)にあつたから、題目だけを摘記し警戒を促しておく。

- (一) 女の性質を早く知り置くこと、
- (二) 遊ばせてやる氣でかゝること、
- (三) 女中の自由になること、
- (四) 料理は腹一杯食はぬこと、
- (五) 落付いて相手の感想や慾望を聞くこと、
- (六) 相手の憧憬に、期待と信頼とを持たせること、
- (七) 散財は少くチップは多く切ること、
- (八) 口数は多くなく温厚なること、
- (九) 女中の身分を蔑まず、何處までも親切らしく應待すること、
- (十) 風采態度に注意し、まづ意氣な扮装をすること、

- (十一) 何時も樂觀的ニニコ／＼してゐること。
 (十二) 長居は禁物のこと。
 (十三) 無暗に口説かぬこと。
 (十四) 何事も淡泊なこと。
 (十五) 金の無い風を決して見せぬこと。
 (十六) 極めて自然に女を讃めること。

かくし日

同伴を遠約した女の口實として、生理的謹慎すべき日であつたからといふ。彼はまたさうした口實を云はせぬために、豫て憊んな風の間ふので、彼女はかくし日を迂濁と云はされてしまふた。貴女の年齢を僕は正確に云ひ當てゝ見せやう、女が興味に耳をすました時「但し掌の筋一本を見、かくし日の日頃をいふて貰ふ二材料が要るるか

う云はれた。正確さを試験してみやうと興する女は、直ぐに釣り込まれて掌を出し問はれた日頃も明確に答へて二材料を提供し、彼の言當ての正否を試みた。即ち不覺にもかくし日を言はせられたのである。言當てる材料としてかくし日を明確に答へねば一と月を上中下旬に別け其何れであるかを答へさせ、次に其旬の何れ頃かを問ひつめて究極答を得られるから、釣られてはいけない。

「先度困つたことがあつた、伴れて行つた途中で、×ほしたといふので不格好をしながら、其儘どこへも行かずに歸つたことがある。お前のは何日頃か？、他の日を選ぶんだが。」かうした細かい間に正直に答へておくと、伴れられた日の、いざといふ場合に出席つたとしてそのとき、今日はかくし日だから……といふ遁辭で防ぐことが出来なくなる。

「花を尋ねる胡蝶」の項補遺

水野はちやうど、鼻の先に糸を見せられてどこまでも走つてゆく犬のやうなものに自分が思へた。「おいでおいで」をされるので息を切つて飛んでゆくと相手はその間に又二三丁先へ行つて「おいでおいで」をやつてゐる。そしてこの次ぎに約束の金を持つてゆくと、いきなりそれを引つたくつて今度は「赤んべえ」をするのぢやないか。かうなつて見ると豫覺はすつかり外れてしまつた。何かいゝ事がありさうで、何にもありはしなかつた。運命の神様はしまひまで彼を騙るうした。きのふの夕がた、眞つすぐ築地へ行つてゐれば、こんな馬鹿げた苦勞をせずとも小金の顔が見られたであらうに……考へるなら今のうちだぞ。この金を渡してしまつてから、こゝ昨日おいで」を食はされたら何にもならんぞ。いつそんな面倒なのはアツサリあきらめて、歸りにすつと築地の方へ回つたらどうか。……

(谷崎潤一郎「黒白」東京朝日新聞より)

「此處までおいで」の項補遺

仇の三百圓

逃げた小鳥を追ふ男……美人女給を連れて警察へ

〇〇〇日午後十一時ごろ京橋築地署へ社員風の男が「この女を脱獄してください」と凄いいモダン・ガールを連れて行つた。

男は府下大井町水神下〇〇〇丸の内某會社員高橋彌五郎(四二)君、女は銀座二丁目カフェエックロネコの女給

〇〇〇れ、子(二二)去る四月ごろれい子が同三丁目カフェエックロネコのクインとして凄腕をふるつてゐる時、高橋がとぼしい月給をいろ／＼に工面して現金二百圓や三越から百圓の着物を買つてやつた。

ところがこの月初め、れい子は姿をくらましてしまつたので、高橋は以來二十日餘毎日女を捜し廻つた末、やつとクロネコにゐるのを突き止め喜んで行つて見ると女はけんもほろ／＼の挨拶、初めてだまされたと知り憤慨の餘り女を警察へ引つ張つたわけである。

れい子はボロ／＼と涙を流してゐる。高橋の前に「私は何もあなたから約束して金を貰つたのではないのです。こんな所へ連れて来て泣いたり男らしくもないそれッほちのお金返して上げるわ」と辯じ立てるけんまくに保官もあきれてゐた

(國民新聞「昭和三、六、二〇より」)

第四編 其日篇

其の日の朝

その日の朝、約束の如く停車場で待合はしてゐた彼は、女が其友と同伴したことを歓迎して、一緒に自動車で三越へ趣いた。そして男は斯ふ云つた。今日は別段用事は無からうね。さうなら早く買物してから遊山にでも行かふ。買物が済んでから自動車を呼んだ。女は義理には同乗せねばならなかつた。車はある樓の前へ着いた。「そんなに駄々を捏ねるものでないよ、迷惑はかけない一寸飯を食ふだけなんだから……そんなに僕は信用が無いの?」……拒む女は、男を怒らしては不可と思ふから、斯ふなればその上拒むことも出来ず、男に従つて座敷へと通つたのであつた。

西久保で降りる筈の電車を朋子に知らぬ振りして、中野まで乗越し「私は貴方を欺いたのです欺いて此處まで連れ出したのです。それは折入つて聽いて頂きたい事があつたからですが、若し私の爲た事をお腹立なら何卒介はず、此處からお歸り下さい。

御遠慮には及びません——それとも私の行く處まで一緒に来て下さいませるか——かういつて女の顔を覗き込まれたとき「媒煙」の朋子ならなくも、凡ての「女はお伺ひしませう」と承諾せざるを得ない程氣の弱いものである。

ウエートレスS子さんを誘惑して最後にすてたあの男は風采が堂々としてゐて話上手で其上金離れがよいので、誰もかれも其男に引きつけられた。彼はS子さんの手堅いのを觀破して、將を射らんとすれば先づ馬を射よの筆法を用ひ、盛んにN子に取入つて歡を得た。手堅いS子さんも彼の見かけが温和しいから、遂ひうかくと三人連れ立つて、郊外散歩ならといふ約束をした。約束の日に三人は、朝から井の頭公園へ行つた。そして時分時に料理屋へ上つた。そのうちにN子に彼は旨を含めて、途中から他へ外らせて、それまではよかつたが、彼は弱い心の心理をよく心得てゐて、女中と申し合はせてS子さんを誘惑して了つた。

蛇が好きなので知られた帝劇女優……は文士□□□□氏と同人妻××に對し×

日附左の説諭願を上野署長の手許に提出した。

説諭願

下谷區上野櫻木町……番地

□	□	□	□
×	×	×	×

右二人に對し御説諭相成り度く候

來履及理由

右□□□□は文筆を業とし論壇に於ては人道主義を唱へ遊蕩文學を排斥するも個人としては其筆と行を異にし常に婦女子の節操を弄び(中略)

一、右□□□□を昨年九月中旬元新聞記者△△△△の紹介により初めて相知れる處、昨年十月三十一日△△△の誘ひを受け三人同道房州に旅行し歸京の際故意か偶然か△△△は綿糸堀にて下車(中略)夕飯を差上るからと無理に自動車に乗せら

れ京橋區木挽町九丁目の待合〇〇〇へ強いて手を捕へて連れ込み酒を強ひられ
 (中略) 四肢の自由を失はしめ (中略) 力を極めて抵抗せしも遂に…… (後略)
 二、(前略) 横濱なる實家に聞え (中略) 自己の名に關するを以て秘密に致し居り
 候も實家より出入を拒絶せらるゝに及んで數回□□□□を訪問して (中略) 戸
 に鍵を掛け一切の出入を遮断するに至り…… (後略)
 三、(前略) 他日に至り強姦罪の告訴を提起するやも計られず候も (中略) 屋内に
 て談話致す様前記二名へ御説諭有之たく (後略)
 右に就き……の語る處によると□□氏と待合に行つた事實は絶対に他言しない口
 約をして置いたに拘はらず、其後□□氏は之を他へ吹聴したのみか……の方から
 進んで露場を演じたやうに云ひ振らしたので、……は非常な迷惑を蒙つた。依て
 之を詰らんが爲めに再三訪問し面會を求めたが□□氏夫妻は常に玄關拂ひを食はせ
 るので、遂に右の説諭願を出したのだといふ。

問題にしやうと意氣まいて彼に對する、怨恨、憎悪、復讐などの達瀬ない感情は初
 めには強いが二度三度、會ふたがために跡方もなく、いつとはなしに消されて了ふも
 のである。慎しむべきは最初の行動である。

×日夜九時市外上澁谷二四先鐵道線路に停んでゐて歐り泣く女を澁谷署の警官が
 なだめて調べると、柄木縣東那須野〇〇〇〇次女たけ(三〇)といふ者で、今年三月
 上旬上京して義兄なる四谷區南町二四××方に身を寄せ職業紹介所の手で芝
 區三田四國町二番地の下宿業△館■方に女中奉公をしてゐたが、郷里から
 親が病氣であるから一旦歸國してくれといふことで、四月五日上野驛に行くとき、
 ■がたけのくるのを待ち合はせてゐて「宇都宮へ行くから一緒に行かう」といふ
 ことで出發したが宇都宮驛へつくと■は、見物して行けと無理にたけを降車さ
 せ同市相生町□□屋旅館に宿泊させ暴行を加へ、翌日も室内に監禁して同様の行動
 で七日朝になつてたけを歸した。彼女はたえ難き怨と恥を感じながら歸宅したが再

び上京して前記義兄方に身を寄せたが、妊娠三ヶ月の身となつたので■■に會はんとしても婿が明かす親兄弟に申し譯が立たず自殺を思ひ立つたといふのであつた。同署では直ちに〇〇を引致した兄弟も参考人として召喚取調べた。相連れて寫眞に撮すことは、永久に保存されること、印象に深く残ること等々のために相互を融和され、斥けやうとしても却て引付けらるゝ力によつて、遠ざかり得ぬものである。アマチュア寫眞流行の折柄並んで撮られ易いが、また之を種に恐迫がましく出られて甚だ迷惑の生することあるも注意せねばならぬ。

「女心、風の如うな」といふ。さればこそ準備行爲とされてゐる誘出は行はれ、最後の目的を、確認のために急速に要求せられるのである。

酔はされて

ウイスキーなどの強烈な酒類は女の好まぬところながら、祝儀を興ふる代償として

飲まされた。ウイスキーを混ぜたサイダー類も、併し之はウキスキーの入つたことを知らなかつたから、頗る美味として好飲された。竊かに適量の抱水クラーを混入したりして、恣うして酔はしておかれて、幾分苦蕩としてきた頃は危険である。同席の男二三人で女一人を酔はせるのは譯もないことで、頻りに酌して強て吞ませられる。入浴を勧められて、不用意にも同意し、用心堅固であるべき衣服類を除かしめられる。浴後の弛態、そして「吞まして酔はして聞きたいことがある」といふ程で彼女の同伴者を頭合を見計らつて他用と稱して席を外させられる等であるから、寧ろ頑強であらねば適宜の處置をとり得なくなる。

又は恐怖を惹きたり野卑さを現らさまに示さぬために、酔ふて頭痛がすると偽りて仰臥し、女に頭を揉ませた。彼女の明輩は前以て金銭や物品を興へられて、買收籠落されて附近に障礙とならず、場所にさしたる不便が無いと見たとき毒盃は盛られる。「買つてやつた衣裳の仕立が出来たか?、と暗に恩を彼女の記憶から惹起させて抗拒

心は麻痺するとき、俄然脊刃は閃く、些しの油断もならぬのである。

初手から怖れられては目的の障碍なれば、いざといふ場合までは、野望の微塵もなき確實な人なりと信用させておくだけで、日歸りの旅などゝても、極めて恐るべき危険なもので、要するに凡そ油断も隙も容るしてはならぬ。

二人寄りそひ肩に手かけて頬すりしたいが主の胸

主の左手に抱擁れて居れど脇の右手がうらめしい

抱きすくめ「可愛いー!」と一言あとからそつと

「そ云つてもいいの?」、は愉ぐらし。

主のお膝に仰向けられて思ひよらない薔薇の花

かりそめの虫にさえも厭はしかつた榮華の百合の花は接吻によつて、手折られたと同様に其ブライドを蹂躪されたものであるとの言葉に同意するであらう。そして其の際、葉も莖も眞實に手折らるゝを拒まぬであらう。

或る婦人雑誌に座談會の會話として、左記の一節が載つてゐた。

男「イザといふ場合に通れる方法として、目下月經中だから不可い」と云つたなら

對手の男も其不快なといふことから、行爲を中止するであらう」

女「否、惡戯をする様な人はそんな事に係はるものですか」と。

最後に注意せぬばならぬことは兩××××××××××××××××××××の挿入を許してはならぬといふことである。何となればさうしたとき拒否方向に働らくべき筋が、元來生理的に飲けて居るからである。

公園内に連れ込み 東京地方裁判所内居住某事務所員×××長女△△(二四)が午後八時ごろ祖母につれられ折から來たる花電車を見物してゐると傍にゐた廿四五歳くらいの霜降背廣服を着た男がよつて來て私は金持の息子だが家へこい洋服を着たけ

れば洋服、袴をはきたければ袴を買つてあげると甘言を以て公園内芝生運動場につれ行き遂に芝生に引倒し凌辱を加へた上何づれにか逃走した。△△は後になつてそれと氣付き青くなつて泣きながら歸宅し涙ながらに此事を母親に訴へたので孫を見失つて案じながら歸宅した祖母と共に△△をつれ午後十時〇〇署に訴へ出たので同署では目出度い奉祝日中のいまはしい奇怪な事件として直に非常線を張つたが犯人は遂に逮捕されない。

右につき署長は曰く「今日は事故数も少く好成績であると思つてよろこんでゐた矢先こんな不祥事が然も帝都の公園内で起つた事は何んとも申し譯がない。今日は公園内は正私服約百名も配置してゐたのですが御存知の通り音楽堂附近の混雑で交通整理や場内整理で手一杯であつたが現場のすぐ傍には通路もあり巡邏の巡査も巡回してゐた筈だし相當群衆もゐたでありませう」と。署では司法主任の取調を受けた被害者の母親〇〇(四二)は恐ろしさにおのゝく△△を伴ひ、午後十一時廿分歸宅し

た。母親は「今夜七時頃風邪で寝てゐる父親の氷を取りに構内辨當店××方へ使にやつたのですが行きながら花電車を見てくるといふので出してやりました。所が八時ごろ氷も持たずにぼんやり歸宅したので不思議に思ひなだめすかして問ひ質すと公園の中で廿四五歳の背廣服をきた男にひきづられて暗闇につれ込まれたのですその時随分大聲をあげて救ひを求めたのですがアノ雑沓にもかゝはらず一人の人影も近よらず遂にとんだきす物にされました實は××の小學校に在學してゐますし大事な娘ですから初めは内密にしておきたいと思つたのですが帝都の公園の中で大膽な振舞をされては黙つてゐるわけにはいかなないので私の一存で訴出た次第ですと悲憤の涙を流してゐた。

右の例中に「ひきづられて暗闇につれ込まれた」とあるが「ひきつられた」といふ意味が深長だらうと思ふ。嫌がつて反抗するのを無理に手を引き行くのも、抗する程ではない手を強く引き寄せつゝ伴ふのも、横に抱き締めるやうに釣上られて行くのも、

肩の邊を抱へられて押されるやうに行くのも、何れもひきづられてつれ込まれたので、其處に反抗するといふ理智の命令が發動する機會の生じ得ない場合が往々ある。

巧言 府下下戸塚町一六二………方の女中□□ □(一九)は數日前何者にか誘拐され同家から戸塚署へ搜索方を願出た。同人は牛込區喜久井町三二法學士と稱する×××(二九)と豫てから關係してゐたが、此程××と手を切ることとなり手切金一千元を調達中、××の友人本所區横川町三九毛織物商●方○○○○(三九)が聞込み去廿八日夜十時□□を甘言を以て誘ひ出し其儘自宅に監禁して無理強ひに關係し誘拐中、戸塚署が探知し 日夜●を引致□□は同署で保護を加へた。

麻布區 筈町大工職■(五〇)の長女△(二〇)は三年前から芝區南濱町八×××氏方へ交換手として通つてゐる内同家へ出入する元船長とかいふ府下北品川

町○○○○(四五)と顔見知りとなつたが去る〇月〃日△が休暇で家に居ると正午頃、○○○が尋ね來りビール等を取り寄せて飲んだ揚向午後四時頃△を言葉巧に誘拐し自動車で麻布網代町の待合○○○に連れ込み藝妓を呼んで遊興の後△を一室に監禁凌辱した。△は其爲め顔色も勝れず遂に前記の次第が兩親に知れたので父の■
■は大に憤慨し親戚其を頼んで○○○に懸合つた處 其男は三十圓の金で○○○に買收されてしまつた。■
■は一時△を親戚に預けそして他の友人に話した處其者は○○○方に越き金千圓を提供せよと脅迫し現金八百圓と金側時計一個とを捲止げた事が此程になつて六本木署の知る處となり取調の結果一件書類を地方裁判所に廻付目下取調中であるが■
■の宅は六疊一間に親子雜居といふ貧困に加へ事件發生以來■
■は仕事も手につかぬといふ。

危 險

「貴女は僕を信用して呉れるか？ 好きなら好きと言つて御覽、黙つて居るのは好き
なからだね」彼がかう云つたに對し、尙ほ黙するのは肯定したと看做さるゝ危険があ
る。「一緒になるか？ え？ 可し!!」といふのが行動の機つけかけである。「若し懐×した
ら手當をやらう、他人に知れる恐れなし、黙して居れば君と僕との二人だけ、他に誰
にも知られずに事が済む、知るは世界に只二人」すれてゐる女でもなければ、恐怖
と羞恥に耳を蔽ふかも知れぬやうな理窟をいふ。「僕の氣狂ぢみた動作は、貴女を愛し
て居ればこそその結果だと思つて、どうぞ／＼寛怒してくれ」之が對手の反抗を制する
氣休めの詐言に用ひられる。斯の如く、彼は彼女をして後顧の憂無からしめんと約し
女を蔑視せる凌辱にあらすして、愛の極致の徴であると説く。

彼は酒に酔ふたやうな、高い調子で磊落に、そして依頼的よりは寧ろ命令的に女給を
使つた。而して國と國との戦争でも、個人相互の喧嘩でも、非理を蔽はんために何等
かの名義名文がなければ突然には出來難いやうに、心の反抗を名文に依つて抑制すべ

く「柔道の型は斯ふだ」など、相對して轉ずるとか、座相撲と稱して擁してもみた。
又は取つた手紙を返せ返さぬで互に揉み合ふ中、併し左様なくとも女は洵然たる醉心
地と彼による胸邊の觸感とが、遂に互の×感を對手方の手によりて受け容るゝ迄にな
れば容易に最後の射止められる。

●男に對しては戯言にも、惚れてゐるなどと云つてはならぬ。男から笑ひながら「君
は僕に惚れて居ないか」と問はれて、戯言だと思ふから、え、惚れてゐるわ位は云ふ。
其處をすかさず、惚れて居るなら證據を見せてくれるだらうね、とたゝみかけられる。
女が、え、何んでも見せますわとでも云つて了はふものなら、此言機を捕へられて言
質を感じしめられつゝ……遂行される。

「或會社の女事務員は、豫て重役が物質的恩惠を施されたが、或日所用があるから
と強て伴はれ、東京驛の一等待合室に待つて居れといふ話で行つてゐると、重役は會
社の自動車で來て、自分と一緒に來いと何が何だか分からずに、自動車に乗せ連れて

聲の信號

イザといふ場合には一應誰れしも拒む。併し、聲を眞實の危険信號として發するものと、聲を殺して發する(種々の心裡關係から)ものとあり、後者の如きは以て過なしとして乗せられる。彼女は弱きもので、力量に於ても及ばぬから、遂に必らず征服されるであらう。少くとも最後迄は反抗し続け得まい即ち其持久力に於て打破されるのであるから、此の大事な場合、決心して大聲を發し救援を求むべきものである。

男は一旦力争しながら反抗或はそれからの支障のために中止すれば、永久に殆んど成功の機を失ふのであるから是非成功せねばならぬとして、同情も何もすて之を最後の時位に心得、可及的敏速な行動をとりて彼をして免脱せしめぬ事を心掛くるであらう。そして體の態度を知つて、悠々たる持久的覺悟に於て繼續試みらるれば、數分の後には遂に彼に名を成さしめることになる。強い反抗をなし得るや否やは、女の最初

の覺悟一つに關すること、殊に多少抗拒し得た場合に「ナアニ之しきの事」と覺悟されて了へば萬事休するが、辛にして「今日成らざるも他日を期して何とか成らうから」とか「執拗と思はれ嫌がらるゝが不利だから」とかを以て寛るされ、彼から機を棄つるに至るまで耐えねばならぬ。終りまで堪え忍ぶ者は救はる。とバイブルの一節にある他人も堪え得たものを、己にのみ不能はない筈と觀じたとき、百倍の力が充實する。禁酒禁煙や朝起きの實行も左様である。辛らさうな寒垢離でも、此意氣で敢行すれば何等困難の感は起こらぬと同様である。

「女は廣義に於て淫賣である」と誰かと言つたなら云はしておくがよい。若しさうした止むを得ざる場合に於てさえ、女は通有的であるから言ふ迄もないが、金を啣ませられたとしても、自ら品性を墜としたのではない暴力によつて止むを得ざるに至つたのだと、少くも、形式的にも自己辨護をなし得る程度の反抗は、自己を蔑まれまいとする心——女といふものゝプライドを失はぬがためにも忘れてはならぬ。

元東京の裁判所に検事をして居た横田氏は、この頃若い娘の凌辱事件で世間が性教育の何のと言囃すので、「私が在職中からの感想によると、この頃の凌辱事件では昔程女が男に烈しく抵抗しなくなつたやうに思ふ」と訊問から得た事實を漏らし、この理由を説明して「今の若い娘は伶俐になつて、純潔や貞操よりも生命を尊ぶやうになつたのだらう。「生命を賭して貞操を守る程野暮な婦人がなくなつたのだらう」と、しかしこの事實は、昔ながらの貞操即生命であるといふ男に都合のよい考が變つて、不可抗力のやうな凌辱は、恰度路傍で犬に噛まれたと同様に、女に其意志が無かつたのだから之が爲め純潔も貞操も失はれたのではないと云ふ思想が、臆げながら婦人に生れたからではないか、といふ新らしい考へ方をする者もある様うだ」と。

中里介山氏の『大菩薩峠』に、來たる五月五日の御嶽山奉納大試合に、龍之助と文

之丞とが立會はねばならぬことになつてゐるが、文之丞は到底龍之助の敵ではないから、龍之助の慈悲によつて、此試合を引分けとして文之丞の負とならぬやうにとお濱が龍之助に頼む段々がある。龍之助は其依頼を拒んだのでお濱は「それではあまりにお強い人情知らずと申すものではムりませぬか!」といふ。龍之助の言葉は或る事件を豫想するものゝ如く、冷たくしかも抉るやうに

「我等が武術の道は、女の操と同じ事でゐる。たとへ親兄弟のためなりとも、操を破るは女の道ではござるまい……それとも、親兄弟の生命にかゝはる時は……その時は女の操、破つてもよいと申さるゝか?」
お濱はぎよつとなつて呟くやうに云つた。

「男の武道と、女の操!」と。

男は度胸で寄り添ふが、女は此方へお寄りとお強命令されるとき蛇に見込まれた墓

の如く、一の暗示感受状態に入つて或程度の自由は自ら束縛される。酒に酔ふて調子の悪い聲を張り上げて、いゝ加減な流行唄を引切りなく唄つてみた。そして女中を捕へて戯れついて、果ては力任せに揉合もした(秀才文壇)

アレクサンドリアのクレメント(Clement)の臧言に見られる如く、極めて深い根柢をもつたもの、様に見える女子の羞耻心は、彼女の着てゐるリンネルの下に潜んでゐるに過ぎぬからして、それを脱ぐと共に消滅する。此の観察は常に女子を非難するシリアン(Cyprian)―クリスト教のために殉教的死を遂げたカーセイジの監督主教の『婦人の慣習に就て』中にも見出される。カサノヴァ(Casanova)―イタリーの冒険家は、女子の羞耻心は、彼女にそれが存しないと決めてかかる事によつて、無くさせられると言ひ、ジエローームは一層學者の良心を發揮して、之を一引用文だと明白に断つて、Scribit Herodotus Quodmuriar cumveste etvorecumbiam 『女子は衣服を脱ぎ

すてると共に羞耻心をも脱ぎ棄てるとヘロドタスは記してゐる』と書いてある(増田一郎譯エリス著性の心理第一卷羞耻心の進化より)(二九頁本能的性動参照)

彼女は『誰か人が来る』と詐り、警めに立退かうとする魔の差迫つた手から脱れやうとしたが、果たし得なかつた。『誰れか人が来た』凭ふ確定的にいつて、魔の注意をば彼女より外させ、其間に巧みに脱れ逃ぐべきである。

魔睡薬は恐ろしいものである。種々の術策によつて用ひられ、遂に依て以て勢力下に支配される。併し魔睡薬より恐ろしいものは、油断と無智とである。

此の原因 二十 日午前品川町北品川一四一〇××××の長女〇〇(二六)は二階便所から男児を産み落として死に至らしめたのを品川署にて知り取調べた。〇〇は 年九月三十日夜近所の自動車運轉手△△△△(二六)に欺され自動車で散歩に出掛けた途

中、車中で無理矢理に暴行されたのが始まりでつひに關係したもので、品川署では關係者一同を召喚すると共に、嬰兒の死體は帝大病院で解剖に附することになつた。

情彌々濃やかなり

或る人は慙ふ云つた。童貞を、いゝいゝとき痛感を感じた女は、其爲めの恐怖と痛苦感で一種の嫌惡を生じ、再び其行爲を受けまいとする。若し周囲の事情が許すならば、彼女は遁逃して近接せぬであらう。故に其處に快感を味ふに至らず情を生ずるに達せずと、そこである通人はいふ、彼女をして遁れ得ざる状態——宿泊——二三日にして其處に濃やかなる眞情を生じ來ると。新婚旅行の一所以を指すか。

幸福の後の女の心理は、それをもつと深刻に味はふとか又は捨鉢的に對手の男に倚らうとする傾きで「私、此儘ぢや否や、此儘ぢや歸らない」と、貴方の行く何處へで

も行くと云つた「媒煙」の朋子のやうになるものだ。此場合、若し此儘別かれれば、二人の燃は原へ戻つて相識らぬ昔と同様になる事が多い。籠に入れて直ぐ出した小鳥は、野生にもどるが、幾日かを籠に養つた小鳥は馴れてくるから、放しても野生とは異ふ。

いゝ温泉に連れ立つて、其處に於て求めんとするものを求め得た彼は「あなたが一日僕に身體を捧げた以上は、今後もし貴女が僕を嫌になつて他へ嫁がうとしても、それは僕の許可なくては嫁ぎ得ない……嫁ぐについて邪魔されることを記憶しておけよ」と云つた。其後は彼女の住所附近の適當な場所に陣を張り、度々入浴等の口實を設けさせては誘出してゐた。

袋の鼠 豫て客より旨を含める待合では、娘と客と共に一室に押し入れて外から出さぬやうにした。袋の鼠のやうな可憐な娘は逃れ出やうと頻りにあせつた。客は之を

防ぎながら「お前に逃げられて堪まるものか、目的を達するためには廿圓もの金を、既にお前の女將の手許に支拂つてあるではないか」斯ふ言ふをきいて娘は、もはや何等の抵抗をもする力が出なかつた。

藝妓と雛妓 十九歳の女が藝妓になつた。普通此種の女として、十九位なら既に其肉體の童貞が保たれてゐないを常とするから、此の藝妓屋の女將も左様推察して、彼等社會の「〇〇」なる經濟上の處置なしに、披露目の日より殆んど彼等の營業たる、席に侍らした。所が事實は、彼女は未だ其童貞が保たれてゐたので、客はこんな意外な儲けがあるから、お披露目の藝妓を買ふべきだよ其方が雛妓を買ふより安上りだ」と或客が語つたと新聞に見えた。

達引く魂膽 或る紋日の夜、北廓の南北弦歌に埋もれて遊君廻しの苦に惱やむ其所

に初回の客あり淡々焉として迫らざるに拘らず遊君情を籠めて去らず思へらく「乙な廻し振り買ひこなせば物になる」と斯くて登樓三回に及ぶや果せるかな「臺の物は妾の方で……」との甘言に遊子欣然措く所を知らず其後四五回の登樓を試みたりしが其次の時彼得意満面として引付に座れば「花魁は一昨夜から居りません」と新造の報告、情夫を伴ひて脱走せるなり男兒が面目を失墜する事情天下其數甚だ多しと雖も假りにも情夫を氣取りし客が女の去りしを知らずして悠然樓に上り込む位愚劣醜體は是れ有らざるべし即ち其遊君は歴としたる情夫を有し時折一圓二圓の達を引きて甘さうな男を捕獲し懸てまとめて是を回收し併せて幾百割の利子を徴せん所存なりしこと疑ふべからず是れ金錢上の達引が手練手管十數種中最も有力なる所以なるが食料一二圓の達引を以てよく一年の馴染を捕へ紋日々々の無心成就するならば眞に經濟的投資たるを失はず(廿世紀二卷四號)獨り北廓や花魁に限るにあらず以て他山の石とすべし。

順次に深くなる誘惑。狸々の話が昔からありますが大方それは酒呑みのことをいふたものでせう。狸々を捕へるのには、酒の香を嗅がせて海から陸に上らせ、罅をこしらへて置いて生捕にしたとのことです。狸々もそれに気がついて、うつかり酒の傍へは近寄れないと、互に戒めておりました所が酒の香を嗅いではどうにもたまらず、一疋が云ひ出しました「飲んででは危険だから、見るだけにして置かうそれなら酔ふ氣づかひは無いから」とそれならよいと一同が賛成して、濱邊へとやつて來ました。初めの申合せ通り、何れも酒を眺めておりましたが、たゞ見てゐたゞけでは物足りなくなり、どうだ嗅いでみやうではないか、飲みさえしなければ酔ふやうなことはないからと、云ひ出した者があり、何れもそれに賛成をして、鼻を酒瓶におしつけて、嗅ぎ初めました。さうするとますます堪えられなくなり、一口ぐらゐ飲んだ所で、何も酔ふわけのものではなし、どうだ一口味つてみることにしやうではないかと發議する者があると、皆な飲みたい連中のことゝて、それがよからうと飲ん

でみました。一口飲んだらもつと飲みたくなり、只一口では如何にもあつけないから、もう一口宛飲まふぢやないかと云ひ出し、其通り々々と更に一口宛飲み、所がそれが三口となり四口となり、漸々酔が廻つて來て、なに澤山飲んだとて踊りさえせねば、罅に陥るやうなことはない、今度は矢鱈に飲み出しました。そして折角よい氣持になつてもつとも踊らないでは一向面白くないではないか、たとへ踊つたとて罅に氣をつけてゐれば大丈夫だらうといふので、一同踊り出しました。踊り出すと興が飛つて來て、罅のことなどは忘れてしまひ、遂にワナにかゝつて生捕になつたといふ話があります。酒呑といふものはよく此の狸々に似てゐます。たゞに酒の誘惑のみではありません、少しでも悪魔の聲に耳を傾けるとか、一度位は何んでもなからうと氣をゆるすと、これらの狸々の陥つたやうな目にあひますから、初めから断然り悪魔を斥けなければ不可せん。

何の教訓 左の法廷記は法律新聞に掲載されたものであるが、何を教訓するか。

東京控訴院刑事部裁判長遠藤武治君、陪席は近幹之助君、竹田音治郎君御列席、
検事は清水孝三郎君御立會ひといふ段取り、被告は木綿小倉の袴に紺飛白の單衣と
いふ書生風の男、職業は支那蕎麥の行商、罪名は猥褻致傷とある。部長遠藤閣下白
扇を右手に嚴然と控えられたり。

「……其方はドウ云ふ考で控訴した。少しは軽くして貰ひたいとでも思ふて居るの
か、お前は南京蕎麥屋なさうだな、ウーム、處が友人と酒を呑んで同居してゐる娘
をイタヅラしたらう。ウーム、其時酒はどの位飲んだか、二升か三升かンーム、其
時お前は其娘に痲病を傳染させたさうだな、その痲病はドコから持つて來た、ン
ム、吉原か洲崎か……中略……先方では五十圓で示談しやうと云ふてゐるさうだに
ナゼ五十圓出さぬ、ンーム、五十圓の都合が出來ぬか、ンーム、出來れば何故示談
しなかつたか、恥かしい、恥かしい場合か、宜しい何月何日迄此事件を待つてやる

から五十圓都合して來い。すれば或はお前の望む様な判決が受けられるかも知れな
いぞ」と大岡越前守振の態度を示して閉廷云々。

怨敵消散 美人が何んだ、生娘が何んだ、それらは、徒らに虚榮に憧れ權勢に阿
ねらうとして居る。虚榮と權勢とは常に金力が原である。現代の結婚が、既に經濟關
係を外にしては美嫁を得ることが出來ぬとの嘆聲をきくのはそも誰の罪か。其邊に蠢
蠢乎としてゐる娘子軍は、金の魔術に易々諾々として魅らされる。工場の女工も、職
業婦人たるの理由も、食はんがためが根本である。美妓も酌女も金の前には頭が上ら
ぬ。娘子も親達も貧乏者は對手とせず、金力に服従する。賣買婚は單り末開國にのみ
殘る風習にあらずして、露骨であるか否かの差のみで何れもみな左様なのである。彼
等が左様な所に居る目的の大部分といふものは「金を得ること」にある。併し要は勿論
萬能力を得るにあるのだが、現社會制度上金は殆んど萬能力を有するに等しいからで

ある。
 從て智謀の能なく計略の力も足らぬ者と雖も、若し其少許宛を體化せしめ、金として蓄積し、之をして大なる能動力を發揮させ得たならば、目的の達成を爲し得るのだ。
 女をしいたぐるの輩が、若し以上の要領として黄金萬能を悟得するならば、己が好奇心や研究慾や優越感などによつて獵つてゐる戀や肉慾やは、安心と理解のために消散されるであらうに。

昭和六年十二月二十日印刷
 昭和六年十二月二十五日發行

性魔の誘惑
 定價金參圓八拾錢

東京市神田區昌平河岸七號地

發行兼印刷人

加藤篤二

東京市神田區昌平河岸二號地

印刷所 加藤印刷所

終

